

架け橋のゆくえ

浅田 雅明

フォスター (E.M.Forster) は作家活動の最初のほぼ20年の間に長編小説を5篇と短編小説集を2冊発表しているが、多くの批評家たちが『インドへの道』(A Passage to India) と並ぶ最高傑作であると指摘する¹ 『ハワーズ・エンド』(Howards End) は第4作目の長編小説として1910年に発表された。そして最後の長編小説『インドへの道』の発表はそれから14年後の1924年のことである。世界で最初に産業革命が起こって以来、イギリスは「世界の工場」として産業資本家の成長とともに自由貿易体制を確立し、1870年頃からは植民地の獲得活動を活発化し大英帝国を築き上げてきたが、20世紀を迎える頃にはアメリカやドイツに追いつけられ、1901年のヴィクトリア女王の死去により繁栄を誇った大英帝国は斜陽の速度を加速し、ついには第1次大戦の苦い勝利のあとは衰退の一途を辿ることになる。急激に都市化が進み変貌する社会のなかでは様々な矛盾や異なる価値観の衝突が表面化していくのだが、こうした不安定な時代のなかで描かれた作品が『ハワーズ・エンド』である²。ハワーズ・エンドとはロンドン郊外のハートフォードシャーにある古い屋敷で、産業革命が起こる前の農村共同体の趣を残す伝統的なイギリスの建物であるが、そのモデルはフォスターが母と4歳から14歳までの10年間を過ごし愛着のある、ロンドン近郊のルクス・ネストと呼ばれる屋敷であることは周知のことである。小説ではこのハワーズ・エンド邸を中心に据え、当時の社会状況を背景に誰が、どのような階級がハワーズ・エンド邸を引き継ぐのかを問いかけているが、それはまたイギリスという国のゆくえを暗示するものでもある。小論では作品の核となるハワーズ・エンド邸に焦点を当て、屋敷の所有者であるルース・ウィルコックス (Ruth Wilcox)、それを引き継ぐマーガレット・シュレーゲル (Margaret Schlegel) と作品の結末に示される将来の所有者となるヘレン・シュレーゲル (Helen

Schlegel) とレナード・バスト (Leonard Bast) の子供が象徴する階級や思想が、異なる価値観とどのように対立し、そして「ただ結びつけよ」(only connect) という意思のもとではたして融和していくのか、そのゆくえを探り、またフォスターが予見するイギリスゆくえをも探るものである。

1. ハワーズ・エンド邸をとりまく状況

イギリスの小説に登場する「家」が、ただ単に作品の背景となっているだけでなく作品全体を象徴する存在として描かれるのはサミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson) の作品から現代作品に至るまで数多いのだが³、ハワーズ・エンド邸もまたその系列に含まれる。この小説ではシュレーゲル家の人々は長年暮らしたロンドンの家を契約期限が切れたために出ていかざるを得なくなり、次の家を探し求めて彷徨い、ついにはハワーズ・エンド邸に行きつく。一方ウィルコックス家はいくつもの家を所有しているが、ひとつの家に落ち着くことはなく、立ち直れないほど気力をなくしたヘンリー・ウィルコックス (Henry Wilcox) は最後に安らぎの場所としてハワーズ・エンド邸に辿り着く。したがって中心となる人物たちが家に対してどのような意識を持っているのか、またどのような家を選択するのかという点に着目すれば、この作品を解釈する手掛かりとなる。

作品の冒頭のヘレンからの手紙にはハワーズ・エンド邸の佇まいが次のように描写されている。シュレーゲル家のマーガレットとヘレンの姉妹はドイツで大聖堂を見学中にウィルコックス家の人々と知り合いになるが、旅行後にウィルコックス家の招待を受け、弟の看病がある姉マーガレットを残し、ひとりヘレンだけが招待に応じてハワーズ・エンド邸に滞在している。

It is old and little, and altogether delightful—red brick....That isn't all the house really, but it's all that one notices—nine windows as you look up from the front garden.

“Then there's very big wych-elm—to the left as you look up—leaning a little over the house, and standing on the boundary between the

garden and meadow.⁴

古くて小さくて、正面の庭から見上げると窓が九つ見える赤煉瓦造りの建物で、大きな榆の木が家を覆い、檜、桜、葡萄の木がある。イギリスの田舎であれば何処にでもあるような平凡で小さな屋敷である⁵。ウィルコックス家の次男ポールと恋に落ちたというヘレンからの突然の手紙はシュレーゲル家の人々を驚かせ、叔母のマント夫人（Mrs. Munt）は急遽ハワーズ・エンド邸に向かうことになるが、ハワーズ・エンド邸の最寄りの駅の情景が次のように描かれている。

The station for Howards End was at Hilton, one of the large villages that are strung so frequently along the North Road, and hat owe their size to the traffic of coaching and pre-coaching days. Being in London, it had not shared in the rural decay,...The station struck an indeterminate note. Into which country will it lead, England or Suburbia? It was new, it had island platforms and a subway, and the superficial comfort exacted by business men. But it hold hints of local life, personal intercourse,... (pp. 12-13) （下線部筆者）

ハワーズ・エンド邸はロンドンから列車で北へ1時間ばかりのところにあるが、「最寄りの駅は新しく、島式プラット・フォームや、地下道など、通勤するビジネスマンたちが要求する類の軽薄で便利な設備は整っていた。しかし、他方どこか田舎の生活、人と人との触れ合いを感じさせるところもあった」と、都会の息吹がすぐそこに迫っている場所にあり、イギリスの田舎と都会のベッドタウンのどちらともいえるような佇まいである。ハワーズ・エンド邸はその駅からさらに車で進んでいった森や牧場が広がる田園地帯にあるが、この地域にあった昔からの牧場は今ではほとんどが姿を消している。小説でハワーズ・エンド邸の不思議な魅力について詳細に描写されるのは、ロンドンのシュレーゲル家の住むウィッカム・プレイス（Wickham Place）の近所に引っ越してきたウィルコックス夫人ルースとマーガレットがクリス

マスの買い物に出かけたときに交わされる会話からである。屋敷の西側の榆の木そばの、もとは仔馬を飼っていた囲い地は、今では文明の象徴といえる自動車の車庫へと姿を変えられている。しかし葡萄の蔓は南側の壁いっばいに絡んで今もあり、ヘンリーにより手を加えられているものの、昔の姿を留めている。マーガレットとハワーズ・エンド邸との接近はルースから一緒にハワーズ・エンドに行こうと突然の誘いを受けることから始まる。一度は誘いを断ったもののマーガレットは思いなおし、ハワーズ・エンドに向かうルースにキングス・クロス駅で追いつくが、そこに偶然にルースの夫と娘が現れ、この時はハワーズ・エンド邸に行くことはできない。マーガレットが実際にハワーズ・エンド邸を訪れることになるのは、ルースが亡くなり3年が過ぎてからのことになるのだ。そしてマーガレットとハワーズ・エンド邸が会おうとき、美しい自然に囲まれた屋敷の様子が次のよう描写されている。

There were the greengage-trees that Helen had once described, there the tennis lawn, there the hedge that would be glorious with dog-roses in June, but the vision now was of black and palest green. Down by the dell-hole more vivid colours were awakening, and Lent lilies stood sentinel on its margin, or advanced in battalions over the grass. Tulips were a tray of jewels. She could not see the wych-elm tree, but a blanch of the celebrated vine, studded with velvet knobs, had covered the porch. She(Margaret) was struck by the fertility of the soil; she had seldom been in a garden where the flowers looked so well, and even the weeds she was idly plucking out of the porch were intensely green. (pp. 196-197)

本降りの雨のなかひとり佇むマーガレットのまえにはハワーズ・エンド邸がその姿を現している。いまはまだ薄い緑色だが、6月になれば薔薇が見事に咲くであろう生垣がある。向こうの窪みには水仙があり、宝石を散りばめたようなチューリップもある。玄関には見事な葡萄の蔓があちこちにビロード

のような芽をふいている。マーガレットはこんなに花が生き生きとしているのを見たことがなかった。その美しさに魅了されたマーガレットは、今までの人々が話し合う世界はここと違って色褪せ、死んでしまった別世界であって、生きているのはいま目の前にある家と庭だけだ (nothing alive but houses and gardens, p. 197) と、ハワーズ・エンド邸の美しさと生命力を強く感じ取る。この屋敷はイギリスの屋敷であり、窓から見える榆の木はイギリスの木なのである。

作品の終盤でハワーズ・エンド邸はヘレンをイギリスに呼び戻し、バストを心臓麻痺で死亡させ、意気消沈したヘンリーを迎え入れて休息を与え、そして新しい命を生み出している。最後の場面を見ると、牧場では草が刈られており、庭では大きな赤いひなげしの花が咲いていて、ヘレンと子供は笑い声をあげ、干し草の大豊作になりそうだと喜んでいる。しかし目を転じればこうした穏やかなハワーズ・エンド邸にも着実に都会の赤錆色、煉瓦造りの家並みが迫っている。

“All he same, London’s creeping.”

She pointed over the meadow—over eight or nine meadows, but at the end of them was a red rust.

“You see that in Surrey and even Hampshire now,” she continued. “I can see it from the Purbeck Downs. And London is only part of something else, I’m afraid. Life’s going to be melted down, all over the world.”...Howards End, Oniton, the Purbeck Downs, the Oderberge, were all survivals, and the melting-pot was being prepared for them. Logically, they had no right to be alive. One’s hope was in the weakness of logic. (p. 340)

過去を象徴するハワーズ・エンド邸は昔からの自然の美しさを受け継いで、しっかりとイギリスの土地に根を下ろしている。しかし平和で穏やかな屋敷に文明という近代化がその触手を伸ばし、すぐ先にはすべてを融かそうとする垣塙が待ち構えている。こうした瀬戸際にいまハワーズ・エンド邸は立た

されているのである。

2. ハワーズ・エンド邸の真の所有者は誰か。

ハワーズ・エンド邸がイギリスの伝統を表し、イギリスの運命を象徴するものであるなら、その所有者がどのような人物であるかもまた重要である。ハワーズ・エンド邸はヨーマンだったルースの祖母の代から受け継がれてきた屋敷であり、ルースはそこで生まれ土地とともに生きてきた。しかしルースの頃になると小規模の農園経営の時代は過ぎ去ってしまい、周辺の農場はひとつまたひとつと、次々に潰されて姿を消している。ハワーズ・エンド邸もその流れには抗しきれず、牧場や屋敷が抵当に入り、ルースとその母は自分たちの遺産がどんどん消えていくのをただ見つめるしか方法はなかった。結婚によりその窮地を救ってくれたのがヘンリー・ウィルコックスである。しかしルースは「過去」の象徴でイギリスの「現在」を象徴するヘンリーの前では無力である。彼の思いどおりに屋敷には手が増えられ、仔馬や時代遅れになった農具は売り飛ばされ、ルースが愛してやまない庭や仔馬の囲い地は、現代文明を象徴する自動車の車庫へと形を変えられている。ヘンリーは大英帝国を牽引する裕福な中産階級に属し、商業主義にどっぷりとつかった、「怒りと電報」とヘレンに揶揄されるような功利主義の実業家であるが、ヘンリーが昔ながらのハワーズ・エンド邸の環境を変えてしまうことにルースは抵抗できない。しかしヘンリーは、農家を改造したものだからどんなに金をかけても結局駄目だと語り、彼は屋敷をただの資産として見ることしかできない。従ってハワーズ・エンド邸の本質、すなわち、受け継いでいる魂というのがあるとするれば、ヘンリーはそれを全く理解できないので、真の意味でハワーズ・エンド邸を所有し変えることはできない。ハワーズ・エンド邸は精神・魂を理解するものだけを受け入れるからである。小説ではルースこそが真のハワーズ・エンド邸の所有者であり、魂の継承者であることをいたるところで明らかにしている。マント夫人が訪れたハワーズ・エンド邸の場面で初めて登場するルースの描写を以下にみてみよう。

She (Mrs. Wilcox) approached just as Helen's letter had described her, trailing noiselessly over the lawn, and there was actually a wisp of hay in her hands. She seemed to belong not to the young people and their motor, but to the house, and to the tree that overshadowed it. One knew that she worshipped the past, and that the instinctive wisdom the past can alone bestow had descended upon her—that wisdom to which we give the clumsy name of aristocracy. High born she might not be. But assuredly she cared about her ancestors, and let them help her. (p. 19)

ルースは手に干し草の小さな束を抱え、芝生の上に長い裾を音もなくすべらせて近づいてくる。自動車に象徴される新しい世界ではなく、この屋敷やそこに覆いかぶさって立っている木々の世界に属しており、過去を崇拜し、過去のみが与えることができる本能的な叡知が具わっている人物だと紹介されている。対照的に、こののち引っ越してハワーズ・エンド邸から離れ大都会ロンドンに住むようになるととたんにルースは体調もすぐれず寝込みがちになり、魅力もなくなってしまう。参加したマーガレットのロンドンの教養がある知人たちとの昼食会では趣味が質素で教養も狭いので、うまく話がかみ合わず、周囲の人たちとうまく融けあわないので、ルースは退屈な人間であるという印象を与えてしまう。そのなかで干し草の束であり、花である (she was a wisp of hay, a flower, p. 70) と描写されるルースが唯一生き生きとするのはハワーズ・エンド邸の話をするときだけである。何故ならハワーズ・エンド邸はまさにルースそのものであり、ルースはこの屋敷が引き継いできた古き良きイギリスの体現者であるからなのだ。マーガレットが住み慣れたウィッカム・プレイスの家を出なくてはならないことを知ったルースの次の言葉は、彼女にとっての家の意味を理解するうえで象徴的である。

To be parted from your house, your father's house—it oughtn't to be allowed. It is worse than dying. I would rather die than—Oh, poor girls! Can what they call civilization be right, if people mayn't die in the room where they were born? My dear, I am so sorry— (p. 80)

生まれた部屋で死ねないなら、文明のほうが間違っていると、父の家、自分の家と別れなくてはならないマーガレットをルースはとても気の毒に思い、自分だったら死んだほうがましだと激しい口調で語っている。この場面だけでもルースにとっては家の存在がいかに重要なものであるかが窺える。

このように、ハワーズ・エンド邸で暮らす時のルースは、家と一体となって土地に馴染み生き生きとしている。彼女の生きる場所はハワーズ・エンド邸であり、ハワーズ・エンド邸こそがルースの精神そのものであるのも、彼女こそが真のハワーズ・エンド邸の所有者といえる。しかし小説のなかで重要な役割を演じ、精神的な支柱ともいえるウィルコックス夫人ルースは、次作『インドへの道』で重要な役割を担うムーア夫人 (Mrs. Moore) と同様に、早々と小説から姿を消してしまう。それにもかかわらずルースは物語の展開に最後まで大きな影響力を持ち続けていて、すべての出来事はハワーズ・エンド邸を軸として展開していき、最後にはハワーズ・エンド邸にすべてが集約されていくことになる。しかしルースの死により、ハワーズ・エンド邸は次に引き継ぐものが現れるまで少しのあいだ物語の展開の後ろに引き下がることになる。

マーガレットとルースの最初の出会いはドイツであったが、二人の友情が急速に深まるのはロンドンにルースが引っ越してきてからである。その後病床のルースはマーガレットにハワーズ・エンド邸を譲りたいという鉛筆書きの遺言を残すのだが、それはいささか唐突な行為であり、ルースとマーガレットの付き合いはそれに値するほど親密なものであったとはいえない。ルースはハワーズ・エンド邸の魂の相続人を求めているのだが⁹、マーガレットが相応しいと直感するところがあったと考えるしかない。マーガレットが家というものに抱いている認識はこの時点ではルースの認識とは異なっているが、それでもマーガレットはインテリでもなく頭の働きが早いわけでもないルースのなかに、なぜか素晴らしいところがあると思わせるところを感じ取る。それはウィルコックス家の人々にもロンドンのマーガレットの知人たちにも理解されていないが、ただマーガレットのみに知覚されているのだ。ハワーズ・エンドへの誘いを断ったあと、マーガレットには、ルースの生涯の情熱はただ一つのこと、自分の屋敷にしかなく、そこはルースにとって神聖

なうちに最も神聖な場所 (Holy of Holies, p. 82) であると思えてくる。このようなマーガレットの思いをルースは直感し、ワハーズ・エンド邸の相続人としてマーガレットを指名したのであろう。しかしヘンリー・ウィルコックスとその子供たちはルースの最後の意思を認めない。親戚でもなく、さらに価値観も全く異なるシュレーゲル家のマーガレットに家族の所有する屋敷を譲ることなどあり得ないと判断するのはウィルコックス家にとってはあまりにも当然のことである。彼らにとってワハーズ・エンド邸は親から子へと引き継ぐべき単なる遺産としての不動産であり、資産であって、ワハーズ・エンドという家が過去から現在へと引き継いできて、そして未来へと伝えていく精神には全く思いが及ばない。結局長男のチャールズがワハーズ・エンド邸の法的所有権を持つことになるのだが、古い農村の家には興味がないのでそこには住まず、他人に貸し出してしまうので、マーガレットにも誰にも引き継がれることはない。その時はルースの死後ウィルコックス夫人となるマーガレットが初めてワハーズ・エンド邸を訪れるまでしばらく待たなくてはならない。

ウィルコックス夫人が亡くなってから2年以上が過ぎ、シュレーゲル家が暮らすロンドンのウィッカム・プレイスは金持ちの家主により新しい豪華な建物に建て替えられるので、契約期限が切れるとマーガレット家の人たちは家を出ていかななくてはならない。職を持たなくても暮らしには困らない裕福な中産階級の彼らには新しい家を買う資産は十分にあるが、30年暮らし、父親の蔵書や家具に囲まれこれまでシュレーゲル家が育ててきた教養、目には見えないけれど長年積み重ねてきた大切な精神の基盤である家を取り壊されることになり、新たに別の家を探さなくてはならないことがマーガレットを憂鬱にさせる。

Her thoughts turned sadly to house-hunting. Wickham Place had been so safe. She feared, fantastically, that her own little flock might be moving into turmoil and squalor, into nearer contact with such episode as these. (p. 111)

憂鬱の原因はマーガレットが認めているように、ウィッカム・ブレイスの家という安全地帯、あるいは停泊地と言ってもいいだろうが、そこから押し流されてしまって初めて家という存在が包括する精神を認識したため、あたらしい精神の積み重ねを始めることに戸惑いを感じているからだ。

マーガレットとヘレンの姉妹は晩餐会、内実は非公式の女性だけの討論会であるがそれを終え、上げ潮の河のさざめきが聞こえ心地よい風の吹くチェルシー河岸通りのベンチに腰をおろす。討論会での話題に触れ、お金はこの世を織り上げる縦糸であるが、横糸は何かというヘレンの問いに対してマーガレットは即座に家であると答え、さらにルースであれば間違いなくハワーズ・エンド邸だったと付け加える。そこにヘンリー・ウィルコックスは偶然居合わせるのだが、彼との会話は三つの点で物語の展開に重要な役割を果たす。①まずバストの勤める保険会社が潰れるかもしれないという情報がヘンリーから与えられることである。この情報はシュレーゲル姉妹からバストに伝わり、バストは忠告に従い別の会社に職を得るが、結果的にはその職も失い、それがハワーズ・エンド邸での死につながっていく。そしてバストの死の責任を負ってチャールズは懲役刑となり、ハワーズ・エンド邸の所有者はマーガレットに移行することになる。②次にマーガレットのヘンリーに対する認識の変化である。この場面でのヘンリーに対するマーガレットの印象の変化を次の引用に見てみよう。

She had always maintained that Mr. Wilcox had a charm. In times of sorrow or emotion his inadequacy had pained her, but it was pleasant to listen to him now, and to watch his thick brown moustache and high forehead confronting the stars. (p. 128)

マーガレットは以前からウィルコックス家に対して共感できるものを感じていた。前の19世紀から男は仕事をしたいという欲求を次第に強めてきているのだが、それには多くの弊害はあるけれど排除してはいけぬ。魂と肉体を破滅から救う道はシュレーゲル家の者がだれも携わっていない仕事であり、その仕事に専念しているウィルコックス家の人たちは怒りっぽく鈍感という

欠点はあるが好ましい感じがすることをマーガレットは認めている。作品の冒頭でヘレンがウィルコックス家のボールにウィルコックス家が体現する男らしさに魅力を感じ、恋に落ちてしまった時と同質のものである。ヘレンは自分が惹かれていたものが違うものだとすぐに判断し、たちどころに恋も冷めてしまったのだが、マーガレットのほうはヘンリー・ウィルコックスの魅力をこの場面では再確認し、それは彼との婚約、結婚へと繋がり、最終的にはハワーズ・エンド邸に辿り着く。③最後に、マーガレットがハワーズ・エンド邸はどうなったかと尋ねることにより、物語の展開からしばし隠れていたハワーズ・エンド邸がふたたび姿を現すことである。マーガレットは、ウィルコックス家の誰もそこに住みたがらないので借家になっているというハワーズ・エンド邸の現状を知ることになる。ウィルコックス家はもともと家には固執していないのだが、この場面ではシュレーゲル家は別の家に移らなくてはならない状況であり、ともに生活の確固たる基盤となる家との結びつきが希薄である。そして家探しを通じてマーガレットとヘンリーは更に親密になり、ついには婚約することになるが、これはチェルシー河岸での会話からわずか10日余りの間に起こったことであり、物語は急速に展開を始め、マーガレットは見えないけれど強い力でハワーズ・エンド邸に引き寄せられていく。

ウィルコックス家と結びつくことになったが、マーガレットとハワーズ・エンド邸のかかわりが直ちに密接なものになるというわけではない。ヘンリーと共に住む家探しをしている間にマーガレットはハワーズ・エンド邸に住みたいという意向をヘンリーに伝えるが、ヘンリーはマーガレットの希望を認めることはなく、結婚後もハワーズ・エンド邸に住むつもりはないと明言し、マーガレットをハワーズ・エンドに近づけようとはしない。ところが賃貸している男が外国転地に伴いハワーズ・エンド邸を又貸しようとしていることを知り激怒したヘンリーは、屋敷が荒れていると聞かされ、マーガレットと一緒に屋敷を見に行こうということになる。こうしてついに、ハワーズ・エンド邸は初めて訪れたマーガレットの前に全貌を現すがその時の様子は前章で引用 (*Howards End*, pp. 196-197) したとおりである。マーガレットの目に映るのはハワーズ・エンド邸を取り巻く土地の美しさである。美し

い花が生き生きとしており、土地の肥沃さに感心したマーガレットにはここがどこか別世界のように感じられる。鍵を取りに行くあいだ屋敷のままで待つようにとヘンリーに言われたが、一層強くなった雨に背中を押されるようにマーガレットは家の中へと導かれる。邸はまるでマーガレットを迎え入れる意思を持っているかのように、玄関の扉には鍵はかかっていたのだ。彼女を迎えたものは荒れ果てた室内であったが、見て回るうちにマーガレットは部屋やそこから見える景色の美しさに心を奪われる。ハワーズ・エンド邸に包まれているとここにくる途中の自動車の中で失くしかけた空間というものの感覚を取り戻すことができるとマーガレットには思えてくる。そんな時に誰もいないはずの屋敷の中で物音が聞こえ、その音はマーガレットには生きている家の心臓の鼓動のように思えるのだが、実は階段を下りてやって来たのは近所の農家の老婆エイヴリー (Avery) である。その老婆は「まあ、ルース・ウィルコックスかと思ったわ」(“Oh! Well, I took you for Ruth Wilcox.” p. 199)と語り、マーガレットの歩き方がルースにそっくりだったという。ハワーズ・エンド邸の守り人と言えるエイヴリーの言葉はルースの遺言を思い起こさせ、マーガレットこそがルースのあとのハワーズ・エンド邸の継承者にふさわしいと示唆しているのは明らかである。そしてマーガレット自身もハワーズ・エンド邸は命のないただの建造物ではなく、生きている屋敷であると自覚することができている。したがってハワーズ・エンド邸を去りロンドンに戻るときにふたたびマーガレットは空間の感覚をなくしてしまうように感じ、ハワーズ・エンド邸が特別な屋敷であるという思いを強くする。その夜、マーガレットは空間の感覚を取り戻してくれたハワーズ・エンド邸から始まって全イギリスを理解しようと試み、ハワーズ・エンド邸はイギリスの屋敷であり、窓から見える榆の木はイギリスの木なのだ(it was English, and the wych-elm that she saw from the window was an English tree. p. 203)と理解する。ハワーズ・エンド邸はまさにイギリスを象徴する建物であり、ハワーズ・エンド邸の精神を理解できるマーガレットはルースの精神を受け継ぐに相応しい人物であることが明らかにされている。

しかしハワーズ・エンド邸は直ちにマーガレットを受け入れてくれた訳ではない。ハワーズ・エンド邸は意思を持つ生き物のように、相応しくないも

のの侵入を拒んでいる。マーガレットがハワーズ・エンド邸を理解できないヘンリーと結婚してともに暮らすならば、その家はハワーズ・エンド邸ではないはずだ。事実、結婚したマーガレットとヘンリーはハワーズ・エンド邸ではなくロンドンのデューシー・ストリートに仮住まいし、次の春にはサセックス州に新しい家を建築する計画である。結局ハワーズ・エンド邸の意思は、賃貸していた人物が外国で死亡し、再びハワーズ・エンド邸を自分の持ち家としていたヘンリーに、ウィッカム・プレイスの引っ越しに伴う蔵書や家具の倉庫としてその屋敷を使用してはどうかという提案させるという形で実行される。ハワーズ・エンド邸はシュレーゲル家の精神の象徴ともいえる蔵書や家具を求めたのだ。そしてハワーズ・エンド邸にシュレーゲル家の精神が持ち込まれるという事実はまた、ハワーズ・エンド邸の精神的な継承者には誰がふさわしく、誰を待ち受けているのかを明確に示している。

ハワーズ・エンド邸に預けたシュレーゲル家の荷物をエイヴリー老婆が勝手に開けているという知らせを受け、マーガレットは再びハワーズ・エンド邸に引き寄せられる。二度目の訪問となるがこのときのマーガレットはハワーズ・エンド邸をとりまくイギリスの精神を認識できる人物として描かれている。

In these English farms, if anywhere, one might see life steadily and see it whole, group in one vision its transitoriness and its eternal youth, connect—connect without bitterness until all men are brothers. (p. 267)

ハワーズ・エンド邸に近づくにつれ、その風景にはイギリス人の長所である熱情に煩わされぬ友愛精神が約束されており、低い煉瓦造りの農家にもその精神が宿っているように思える。屋敷の鍵をもらいに立ち寄った農家の内部は外観とは異なり都会的な雰囲気に変えられていることにマーガレットは失望するが、それでもすべての人間を結び合わせることができる場所があるとすれば、それはイギリスの農園であるはずだと感じる。ハワーズ・エンド邸に入ったマーガレットが驚いたことには、はそこにウィッカム・プレイスの書斎の家具が並び、絨毯が敷いてあり、仕事机は窓のそばに置かれ、暖炉の

向かいの窓には本棚が並んでいて、全てがあるべき場所に収まっているような風情なのである。エイヴリー老婆が何日もかけて作業した結果なのだが、老婆は次のように語る。

“The house has been empty long enough,” said the old woman.... “Mrs. Wilcox, it has been mistake upon mistake for fifty years. The house is Mrs. Wilcox’s, and she would not desire it to stand empty any longer. (p. 269)

エイヴリー老婆はハワーズ・エンド邸の伝統を見届ける象徴として描かれているが、老婆によれば屋敷は長い間空っぽで間違い続きであったのだ。マーガレットがここに住む予定はないと告げても老婆は「奥様はここに戻ってきて住むつもりはあるまいと思っておられるが、でもきつともどってこられません」(You think that you won’t come back to live here, Mrs. Wilcox, but you will. p. 270)「奥様はいまここに住んでいるではありませんか」(You are living here now. (p. 270) と、ハワーズ・エンド邸の代弁者として予言的な言葉をマーガレットに投げかける。

次にマーガレットがハワーズ・エンド邸に行くのは、外国に行き長い間姿を現さないヘレンを心配し、叔母が体調不良だという理由でハワーズ・エンド邸にヘレンを呼び戻す時である。この時にはマーガレットとヘレンのシュレーゲル姉妹の目をとおしてハワーズ・エンド邸について語られるが、最初に訪れた時のウィルコックス家の持ち物が置かれていた時よりもハワーズ・エンド邸はずっと生き生きとしているとヘレンには感じられる。

Now this hasn’t the feel of a dead house. The hall seems more alive even than in the old days, when it held the Wilcoxes’ own things. (p. 293)

ヘレンはウィッカム・プレイスにあった家具や本が飾られてあるハワーズ・エンド邸を自分の家のように心地よく感じる。ウィッカム・プレイスの家は北向きであったため日差しを浴びることがなかった椅子は、今ではハワー

ズ・エンドの食堂におかれ、30年ぶりに日光を浴びて生き返り、背もたれの部分はとても暖かい。ハワーズ・エンド邸には人が住んでいなくても、自分たちよりずっと確実に生きているのだとヘレンには感じられる。それにもかかわらずシュレーゲル姉妹はハワーズ・エンド邸を去り、ふたりでドイツに発つ決心をする。ヘンリーがどうしてもヘレンをハワーズ・エンド邸に泊まらせることを認めないからである。それでもハワーズ・エンド邸とヘンリーから離れる前に一晩だけ姉妹はこの屋敷で過ごすことにする。その夜月の光に照らされた平和で穏やかな時を過ごしながら、姉妹はいつの瞬間もルースを感じるができるのだ。

I feel that you and I and Henry are only fragments of that woman's mind. She knows everything. She is everything. She is the house, and the tree that leans over it. (p. 313)

「あなたも私もヘンリーも夫人の精神の一部にしかすぎないって。夫人は全てを知っているし、すべてなのよ。屋敷でもあり、その上に覆いかぶさっている木でもあるの」と、この屋敷こそがルースの精神そのものであり、ルースにとって特別な場所であることを強く意識している。ヘンリーが原因でシュレーゲル姉妹はハワーズ・エンド邸を立ち去ることにするが、シュレーゲル姉妹をハワーズ・エンド邸から追い払おうとして、ウィルコックス家は不幸に見舞われる。長男のチャールズ・ウィルコックスは翌朝二人を追い払うためにハワーズ・エンド邸に出かけ、そこでバストに出くわし、刀身で打ちつけ、その結果心臓麻痺でバストは命を落としてしまう。ハワーズ・エンド邸の意思を拒み、正当な後継者を認めないものはハワーズ・エンド邸により断罪されるのだ。

ハワーズ・エンド邸を離れる決心をしたマーガレットが結局ハワーズ・エンド邸に暮らすことになった訳は、チャールズが懲役三年の刑を下されたことですっかり気力をなくしたヘンリーがマーガレットに助けを求めてきたからである。彼女はハワーズ・エンド邸にヘンリーを連れていき、そこで休養を取らせるのである。

She did what seemed easiest—she took him down to recruit at Howards End. (p. 335)

マーガレットにとって衰弱したヘンリーをハワーズ・エンド邸に連れていくことは自然の流れであり、ハワーズ・エンド邸も実業家としての生活を捨てたヘンリーを受け入れてくれるのである。作品の最後の場面ではウィルコックス家の総意として、ハワーズ・エンド邸は正式にマーガレットに遺贈されることになる。そしてマーガレットのあとの将来の所有者として、ルースのようにハワーズ・エンド邸で生まれたヘレンとバストの子供が引き継ぐことになる。ハワーズ・エンド邸の所有者をマーガレットにというルースの遺言はウィルコックス家によって無視されたのだが、すべての出来事はハワーズ・エンド邸を中心にして展開し、最後にはハワーズ・エンドへと引き寄せられていき、ここにルースの意思が実現することになる。

3. シュレーゲル家とウィルコックス家の価値観の衝突

ハワーズ・エンド邸をだれが引き継いでいくのかという問いを基軸として作品が展開するが、それはまたシュレーゲル家とウィルコックス家のふたつの家族の価値観を巡る展開でもある。シュレーゲル姉妹は物質万能主義よりは知性を重んじる理想主義者であったドイツ人の父親から受け継いだ精神を持ち、精神的な生活を営み、文学や芸術に関心があり目には見えないもの、内的生活、個人と個人との人間同士の関係に価値をみいだす。マーガレット達の母親はイギリス人であるが、イギリスの歴史に於いて最大の隆盛を誇ったヴィクトリア女王の家族と同様に裕福なシュレーゲル家にも父系からドイツ人の血が混じっており、この点でシュレーゲル家はまさに当時のイギリス的な家族であるといえるだろう。そしてこのことは20世紀前半のヨーロッパの状況を考慮すれば興味深いものがある。ただしこの小説でのドイツのとらえ方は文学、芸術において卓越した精神性を備えたイメージによるものではあるが。シュレーゲル家は裕福で仕事を持たずイギリスのジェントリー的な暮らしをしているが、姉のマーガレットは美しくて際立って才気煥発という

わけでもないが、それに代わる深遠な生命力と常に誠意のこもった応対ができる人物である。だが衝動的でひとつの決断から他の決断へと一足飛びに飛び移る側面もあり、それは妹ヘレンにも見いだされる性質である。

ウィルコックス家の人々は人間的な要素が最も重要なものとは思えない。お金第一の物質主義者であり精神的なものには興味を示さないのが、シュレーゲル家の価値観とは対極にいる。それはハワーズ・エンド邸を不動産、財産の観点からしか見ることができないというところにも明らかに示されている。

ハワーズ・エンド邸の所有を巡ってはこの対立する二つの家族、その価値観の対立という構造で進んでいく。ウィルコックス家のなかにおいて一人価値観が異なり孤立しているルースは当初からハワーズ・エンド邸を引き継ぐのはマーガレットであると感知しており、最終的にはルースの意思どおりになるのだが、そのことをもってシュレーゲル的価値観が結局は物質主義を牽引するウィルコックス的価値観に勝り、それがハワーズ・エンド邸、いやイギリスらしさ、イギリスの伝統を引き継ぐものだという結論を導く単純な二項対立の構図となっているとは言い難い。何故ならシュレーゲル姉妹は完璧で揺るぎない価値観を持っているのではなく、異なる価値観に触れてそれぞれが揺れ動き、変化を遂げているからである。ヘレンは自分の人生観が世間知らずの空理空論であり、平等や婦人参政権、社会主義などナンセンスで、芸術や文学も人格強化に役立たなければナンセンスと、実業家の一家であるウィルコックス家の人々からシュレーゲル的迷信が覆されるのに内心嬉しさを覚え揺れ動くが、実のところ彼らの主義は新聞とゴルフのクラブで作られた脆弱な壁に過ぎず、それが崩れるとあとに残るのは恐怖と空虚だけだと看破する。その一方で、ヘレンはポールを男性的で活気のあるウィルコックス家を代表する人物と思い込みひとつの家族と容易に恋に落ちるし、バストとはヘンリー・ウィルコックスに対する復讐と、バストに対する償いから衝動的に関係を持つなど、ともに相手の人物を正しく理解していないという間違いを犯す人物として描かれていて、完璧な人物とはいえない。

シュレーゲル家には先代から残された十分な財産があるのでお金の心配など不必要である。裕福な中産階級に属し精神的なものを重視する暮らしを満

喫しているが、マーガレットはウィルコックス家と同じように自分たちが「お金という島の上に立っている」(You and I and the Wilcoxes stand upon money as upon islands. p. 57) と共通の基盤にいることも認識している。また、ヘンリーと親しくなるにつれてウィルコックス家と係ることが刺激になり、その結果好感に近いものを覚えるようになっていく。

To Margaret this life was to remain a real force. She could not despise it, as Helen and Tibby affected to do. It fostered such virtues as neatness, decision, and obedience, virtues of the second rank, no doubt, but they have formed our civilization. They form character, too; Margaret could not doubt it...How dare Schlegels despise Wilcoxes, when it takes all sorts to make a world! (p. 100)

自分たちとは異なる「外の人生」に属するウィルコックス家であるが、世界を作るにはあらゆる種類の間が必要であるから、ヘレンや弟ティヴィー(Tibby)が軽蔑するウィルコックス的美徳を軽蔑できないとマーガレットは考える。同じシュレーゲル家のなかでも考えは異なり、マーガレットは相対するものを対比するのではなく融和させなくてはならないと考える。大帝国と聞くとうんざりするが、それを築き上げた行為が崇高であることを認め、ウィルコックス家はまさにそうした人々に属していると考え。現代の生活をマーガレットは全体的に眺め、ウィルコックス氏は集中的に眺めるというように異なる視点を持つ関係ではあるが、それは刺激を与えてくれる関係であると実感し、ヘンリーと一緒にいるのがマーガレットは嫌でない。

If Wilcoxes hadn't worked and died in England for thousands of years, you and I couldn't sit here without having our throats cut. There would be no trains, no ships to carry us literary people about in, no fields even. Just savagery. No—perhaps not even that. Without their spirit life might never have moved out of protoplasm. (pp. 171-172)

ウィルコックス家のような人々がイギリスのために働いてくれていなかったら、自分たちのような文学好きの人間を運んでくれる汽車も汽船もなく、ただ野蛮な状況のままであったのだとマーガレットは考えることができる。こうした考え方はマーガレットが基本的に備えていたものか、あるいはルースに触発されたものであるのかは定かでないが、マーガレットがヘンリー・ウィルコックスとの結婚を決心する最大の理由は、異なる価値観と価値観、象徴的に言えば散文と情熱をただ結び合わせる虹の架け橋 (the rainbow bridge that should connect the prose in us with the passion, p. 183) をつくる為である。このようにウィルコックス家との交遊が深まっていくなかでマーガレットはウィルコックス的価値観に理解を示し、二つの価値観の中を揺れ動く。異質なもの同士をただ結びつけようと願うマーガレットであるが、こうした理想のもとで、どのような家を望んでいるのか、マーガレットは自分でもわからず混乱していくことは興味深い。妻となってデューシー・ストリート家に住むマーガレットは芝居や討論会には次第に魅力を感じなくなってしまい、言葉からもの (from words to things) の段階へと移行し、変化を遂げていく。異なる価値観を対立させるのではなくただ結びつけることによって融和させようとマーガレットは試みるのだが、その理想の実現は容易なものではないことが示されている。ウィルコックス家の人々がシュレーゲル家の所有となることを最後まで強く拒んでいたハワーズ・エンド邸の所有者にマーガレットがなるということは、シュレーゲル家の価値観がウィルコックス家の価値観に打ち勝ったということを高らかに宣言しているのでもなく、マーガレットが結婚に際して望んでいた虹の架け橋が実現したというわけでもない。ヘンリーは自分の価値観を変えたわけではなく、ただ撤退しただけである。チャールズの逮捕により、いとも簡単に壁が崩れ去り、気力をなくした夫ヘンリーを慰め、休養を与える最も容易な場所がハワーズ・エンド邸であったということである。この寸前にはマーガレットはヘンリーと別れ、ハワーズ・エンド邸からも離れ、ヘレンとともにイギリスからミュンヘンに行く決心をしていたのだから。

4. 終章

長編小説『ハワーズ・エンド』が提起しているビジョンは比較的シンプルであり理解することはさほど困難なことではない。「イングランドの象徴は、屋敷であり、その屋敷の名前がこの作品のタイトルとなっている」とトリリングが述べているように、多くの批評家がこの作品の軸となるのがハワーズ・エンドという屋敷であることを指摘している⁷。事実この小説ではハワーズ・エンド邸を中心にプロットが展開し、「誰がイギリスを受け継ぐのか？」と問い続け最終的にはハワーズ・エンド邸に全てが集約される。ハワーズ・エンド邸はイギリスの古き良き伝統の象徴であり、それが示すのは財産ではなく精神である。産業革命に始まり19世紀の工業化にともなって農村は急速に消滅し、物質主義万能の考え方は伝統的な倫理観に脅威を与えつつあった。そんな時代の荒波の中にハワーズ・エンド邸は晒されているが、イギリスの過去、現在を生きてきて、そして未来に向かって生き続けていかねばならない。ハワーズ・エンド邸が建てられたのは産業革命が起こる前のことで、そこは伝統的なイギリスの農家である。産業革命後急速に台頭してくるイギリスの中産階級の象徴であるウィルコックス家のヘンリーは昔ながらのハワーズ・エンド邸を変えていくが、農業が中心であった村落共同体の時代の感覚を残した人物であるルースは実りの悪い葡萄の蔓を切ることに断固として反対をする。屋敷をとりまく蔓はまさにこの家の歴史であり、それはイギリスの伝統を象徴しているので、蔓を切断して伝統を断ち切るとそこに残るのはただ混乱のみである。ルースはイギリスの伝統を受け継ぐ人物であるが、誰がハワーズ・エンド邸を引き継いでいくのかという問いは、誰がイギリスの伝統を引き継ぐのかということであり、既に様々な思想や価値観が混在し混沌とした様相を呈していた当時の社会にあって、イギリスの将来のゆくえ、展望を問いかけるものである。小説中でフォスターはマーガレットに、「すべての人間が兄弟になるまで苦々しさを感じることなしに結び合わせるができる場所があるとすれば、それはイギリスの農園であるはずだ」と語らせているが、イギリスの農園にその望みを託したいという作者フォスターのメッセージは明らかである。

小説のビジョンの理解はそれほど困難ではないと前述したが、この小説の構成はこれ以前の作品よりは遥かに複雑なものとなっている。『天使も踏むを恐れるところ』(Where Angels Fear to Tread, 1905) 『ロンゲスト・ジャーニー』(The Longest Journey, 1907) 『眺めのいい部屋』(A Room with a View, 1908) の3つの長編小説がこの作品の前に発表されているが、イギリス的価値観とイタリア的価値観など、小説ではともに対立するふたつの価値観の対立や衝突のなかで成長を遂げる登場人物の姿が描かれている。『ハワーズ・エンド』に於いても同様に二項対立を中心にして描かれているのだが、これまでのテーマを更に発展させ充実させた構造となっている⁸。この小説ではただ単にシュレーゲル的価値観とウィルコックス的価値観の対立という、今までのような単純な二項対立だけではない。対立するものは正当な相続人と不当な相続人、過去と現在、農村と都会、物質と精神、ウィルコックス家が象徴する男性とシュレーゲル家が象徴する女性、中産階級の上流と下層など、様々な対立の構造がある。しかしこの小説を今までの3つの長編小説と比較して遥かに成熟した作品としているのは、対立する二つの要素の種類が多さの加えてその対立するものの複雑さである。サブタイトルの“Only connect...”には様々な種類の異なる要素をただ結びつけなくてはならないというメッセージが込められており、マーガレットは利益を追求する拝金主義、現実主義者のウィルコックス家を頭ごなしに軽蔑しようとはしないで、理解しようと実践する。また裕福な中産階級のシュレーゲル家は労働者階級から這い上がってきて中産階級の最下層にいるバストを理解しようとするのだ。様々な対立のなかで中心におかれているのがシュレーゲル家とウィルコックス家の対立であることは明白だが、その対立は複雑である。精神主義と功利主義の衝突が彼らの対立を象徴するものだが、マーガレットの家に対する認識の変化に見られるように彼女の思考は単純ではない。その変化がルースにより触発されたものであるなら、マーガレットの認識はルースの認識と同一化していると言える。となればマーガレットとウィルコックス家との対立はルースが象徴する「過去」「自然」「農村」とウィルコックス家が象徴する「現在」「工業」「都会」の対立を意味することにもなる。ハワーズ・エンド邸に拒否されるウィルコックス家の人々はルースを除いて干し草熱に

悩まされるのは象徴的だが、対するシュレーゲル家でも弟のティヴィーは同様にひどい干し草熱で苦しんでいる。やはり単純な二項対立で論じることはいできない。

このような様々な対立のなかでマーガレットはヘンリーとの結婚により理想とする虹の架け橋を完成させることができたのであろうか。ヘンリーの欠点を認識しつつもマーガレットは彼を理解しただ結びつけようと結婚をする。しかしマーガレットが下した結論はヘンリーと別れ、ハワーズ・エンドとも離れて外国に行くというものであるから、理想の架け橋は対岸に届いているとはいえない。結局ハワーズ・エンド邸にマーガレットがヘンリーと住むことになるのはヘンリーが自分の主義や生き方を放棄したためであり、単純な二項対立の融和とはいかないのである。小説の最後の場面はこうした対立と融和の試みのゆくえ、イギリスの未来を予測する手掛かりを与えている。ハワーズ・エンド邸の正当な相続人となったマーガレットだが、私は子供が好きでないから、いなくて幸いだと思っている、現実の子供とか子供のあるべき姿なんかには、少しも関心がない (I do not love children. I am thankful to have none. p. 338) と語り、ヘンリーとのあいだに後継ぎが生まれないことを示唆している。最後の場面では干し草畑で人々が忙しそうに働き幸せそうだが、ヘレンはもう男を愛せないといい、マーガレットは子供を愛することはできないという⁹。見上げれば都会の赤煉瓦色の建物がすべてを溶かして鑄直おそうかとするように不気味な兆候を見せながら赤錆のようにハワーズ・エンドに忍び寄っている。

ますます細分化していく多様な価値観の世界で我々はどのように融和していくべきなのだろうか。作者フォスターが提起する答えは、異なるものをただ結びつけよ、であるが、それはまた同時にどんなに複雑で困難な道程であるかが示されている。様々な異なる種類の人々がひとつの世界観によってひとつに調和する結びつきではなく、様々な人々がそれぞれの立場を維持しながら、最終的な結論を保留したまま間接的にむすびつかなくてはならないのだ。『ハワーズ・エンド』の次の作品はフォスターの最後の長編小説となる『インドへの道』だが発表までにこれからさらに14年を要するが、小説の最後はこのような言葉で閉じられている。

“Why can’t we be friends now?...It’s what I want. It’s what you want.”
But the horses didn’t want it...the earth didn’t want it...“No, not yet,”
and the sky said, “No, not there.”¹⁰

「どうして僕たちは今友達になれないんだ？ 僕はそうなりたいんだ。
君だってそう願っているんだ。」

だが彼らの馬はそれを望んではいなかった。大地も望んではいなかった、
「だめだ、まだだめだ」そして、空も言った、「だめだ、まだだめだ」

フォスターは異なる価値観の衝突よりも人と人との関係に鋭い興味を持っており、人間関係を構築するなかで異なる文化、価値観の融和を求めようとした。『ハワーズ・エンド』の結末では将来の屋敷の継承者となる子供は新たな階級に属し、牧草地で戯れており、つかの間の融和と希望がもたらされた感がある。しかしそのすぐ先には暗雲が迫ってきている。虹の架け橋の道程は困難であり、それはまだまだ遠い。

Notes:

1. “*Howards End* is undoubtedly Forster’s masterpiece; it develops to their full the themes and attitudes of the early books and throw back upon them a new and enhancing light.” (Lionel Trilling, *E.M.Forster*, London: The Hogarth Press, 1969, p.99)
“This novel assures its author a place amongst the handful of living writers who count.” (Athenaeum, 3 December, 1910)
“*Howards End* is a riper work altogether, and raises its author to a place among contemporary novelists.” (*Daily Mail*, 17 November, 1910)
“he has written a book in which his highly original talent had found full and ripe expression” (*The Times Literary Supplement*, 27 October, 1910)
2. There is no doubt that *Howards End* is concerned with the reality of early twentieth-century England, an England of the motorcar, suburbanization, class war, colonial expansion and exploitation. (Nicholas Royle, *E.M.Forster*, United Kingdom: Northcote House Publishers Ltd., 1999, p.48.)
3. Grandison Hall, Brambleton Hall, Waverly Honour, Tully Veolan, Wuthering Heights, Thrushcross Grange, Thornfield, Ullathorne Court, Grandcourt, Poynton, Medley, Bladesover, Groby, Crome: the list could be tripled without exhausting our sense of the

significant roles houses have played in the history of English fiction. (Duckworth, Alistair M., *HOWARDS END: E.M.Forster's House of Fiction*. Twayne Publishers, New York, 1992, p.58.)

4. Forster, E.M. *Howards End*. London: Edward Arnold, 1910, p.1
以降引用の頁数はこの版による。
5. 『E.M. フォースター著作集3 ハワーズ・エンド』小池茂訳、みすず書房、1994年を参考にした。
6. They could not know that to her it had been a spirit, for which she sought a spiritual heir. (*Howards End*, p.95)
7. Trilling, Lionel. *E.M.Forster*. London: The Hogarth Press, 1969, p.102.
Howards End is a novel about England's fate....Like the plots of so many English novels, the plot of *Howards End* is about the rights of property, about a destroyed will-and - testament and rightful and wrongful heirs. It asks the question. "Who shall inherit England?"
8. What my comments do suggest, however, is that Forster, in his three early novels, has not fully done his job as a novelist: he represents the truth but he does not show the difficulties the truth must meet. And the criterion by which this judgement is made is a work of Forster's own: *Howards End* is a work of full responsibility. (Trilling, 101-102)
9. Martin, John Sayre, *E.M.Forster, The endless journey*, Cambridge: Cambridge University Press, 1977, p.125
The lives of both sisters are still incomplete: Helen has a child but no husband; Margaret, a husband but no child. Finally, Margaret's settlement at Howards End constitutes a visible retreat from the world she had once professed to admire, not a stronger connection with it. Like some of the characters in Forster's early short stories, she has escaped to an 'other kingdom'.
10. Forster, E.M. *A Passage to India*. London: Edward Arnold & CO, 1924, p.325